2015 年 4 月 11 日（土）　北海道新聞朝刊掲載

（土曜日）　北海道新聞　第3種郵便物認可

はたらく.com　就活　仕事

地元企業に目を向けて

中学高校生らに地元企業へ目を向けてもらうため、無料の職業情報誌「さくらノート」の北海道版が創刊された。出版や広告事業などを行う「エムジー・コーポレーション」（札幌、後藤洋社長）が発行し、13日から順次、札幌や近郊の中学や職業科を持つ高校などに配布を始める。「That's 天職」と題して、生き生きと働く人たちの姿を紹介しており、発行人の後藤章仁専務(38)は「学校での職業教育などに役立ててほしい」と期待する。人材不足に悩む企業が少なくない中、地域密着の取り組みとして注目を集めそうだ。

（編集委員　川島博行）

第1号を手に、発行の意義などを語る後藤章仁専務（右）と石村優さん

中高生職業情報誌「さくらノート」道内版創刊

「さくらノート」は2007年、金沢市内で会社勤めをしていた中山貴之さん(50)が新たに会社を設立し、石川県版を出したのが始まり。09年12月に富山県版、10年7月に横浜・横須賀・川崎版も出した。現在は社名も「さくらノート」（石川県白山市）とし、各版によって違うが、年に1～5回発行している。

中山さん側からノウハウの提供を受け、パートナー会社として発行するのはエムジー・コーポレーションの北海道版が初めて。同社の新規事業コンテストで昨年4月、札幌営業部の石村優さん(26)による北海道版発行の企画書が最優秀賞に選ばれたのがきっかけだった。同7月、後藤社長と石村さんが中山さんの元を訪ねて話を聞いた後、半年余りで実現にこぎ着けた。

インターネットを検索していて偶然、「さくらノート」を見つけたという石村さん。「この取り組みは地元の人を紹介している点がいい。地元にも良い企業があることを中学生の時から知っていれば、選択肢の幅がずごく広がります」

第1号はB5判、32ページ。石川県版などに沿った構成で、「That's 天職」で18人を紹介している。20～40歳代で、北海道新幹線のトンネル建設の担当社員、助産師、生活相談員、インテリアコーディネーター、建設機械操縦士、洋菓子製造、幼稚園教諭、免疫細胞培養士、

生き生き働く先輩の姿 紹介

「さくらノート」北海道版の第1号

カーディーラーの販売担当、生鮮水産物卸売り、大型トレーラー運転手など多彩。職場での写真を織り交ぜ、仕事を選んだ理由や内容、やりがい、目標を語ってもらい、「これから花咲くみなさんへ」と題した就活への助言やエールも添えた。簡略な企業情報も載せている。

このほか、ケアマネジャーや葬祭ディレクターなど「That's 天職」で登場した資格を解説するコーナーを設け、中学や高校の教諭が自身の恩師について語るリレーエッセー「先生の先生！」も掲載した。

後藤専務は「働いている人が輝くような内容にしたかった。いろいろな職業を知る道筋を付けてあげれば、将来の目標を持った選び方ができる。親も子供が持ち帰った情報誌を見れば、後押ししてくれることもあると思います」と話す。

第1号は、同社が発行している育児情報誌「mamacha（ママチャ）」の担当者たちが並行して携わった。取材にも加わった後藤専務は「楽しそうに、そして誇りを持って仕事をしており、モチベーションの高さや前向きな姿勢に触れ、勉強になった」と語る。石村さんも「知らない世界に出合え、いい経験になります」という。年に2回発行し、9月末予定の次号に向けては石村さんを含め専任の担当者で取り組む。

地域密着「選択の幅広げて」

事業を軌道に乗せるため、取り組みに賛同する協賛企業から1口年に2万4千円の賛助会費を募った上、希望する協賛企業の従業員を有料で取材し、情報誌の「That's 天職」などに掲載する。協賛企業は毎回、巻末の一覧表に紹介され、職場体験や職業講話の対応状況も記した。

7万部を作製。札幌や千歳、恵庭、北広島、江別、石狩の各市の中学、商業や工業など職業科を持つ高校などを社員で手分けして訪ね、趣旨を説明し、必要数などを聞いて回った。

協賛企業は現在、27社。後藤専務は「今後は、協賛企業もページ数も倍程度に増やし、動画版など新たなものも商品化したい」と語る。東北各県に営業所を持つ同社は、将来的には道内全域、さらに東北地方にも事業を広げたい考えだ。

サクラのように花を咲かせ、「ノート」は名詞の「帳面」と動詞の「気づく」の意を掛けて、「ノートに未来を描き、自身の可能性に気づいてほしい」との思いを込めた。中山さんは「職業紹介だけでなく、働く人たちの生き方を伝え、郷土愛を育んでほしい」と望む。北海道版の発行は、こうした思いが道内にも根付くきっかけになりそうだ。